

地質60 大正大噴火を上回る安永大噴火

地質担当 若松 斉昭

桜島大正大噴火から110年を迎え、当館では企画展「シン・サクラジマ～鮮やかに蘇る大正大噴火の記録～」を開催しています。アンケートでは、回答者の約3割が大正大噴火を初めて知ったと答えています。大正大噴火から135年前にも大噴火が起きていたことを知っている人は、さらに少ないことが想像できます。そこで今回は、大正大噴火のひとつ前の大噴火「安永大噴火」を取り上げます。

繰り返される大噴火

桜島では、有史以来4回のプリニー式噴火（大量の火山灰や軽石を上空高く噴出する大規模な爆発的噴火）が起きており、歴史時代の4大噴火と呼ばれています。表を見ると、安永大噴火におけるマグマ換算での噴出物総量は大正大噴火を上回り、桜島での歴史時代で最大の噴火であったことがわかります。

表 歴史時代の4大噴火（味喜・小林，2016を簡略化）

噴火の名称	噴火年代 (西暦)	マグマ換算総 噴出量 (km ³)
天平宝字噴火	764年-766年	0.88
文明噴火	1471年-1476年	0.81
安永大噴火	1779年-1782年	1.82
大正大噴火	1914年-1915年	1.54

「安永」ってどんな時代？

安永という元号は西暦1772年から1781年で、江戸時代の中頃に当たります。10代将軍徳川家治の治世で、安永元年には田沼意次が老中に抜擢されています。安永3年には杉田玄白らによる「解体新書」が発行され、安永5年には平賀源内がエレキテルを製作しています。また、海外では1776年にアメリカ独立宣言が採択されました。「安永」は歴史の教科書の中でしか知らない遠い昔といった感覚です。

安永大噴火で起きたこと

遠い昔と書きましたが、江戸時代には幕府や藩による各種記録が文書として数多く残されており、庶民も貸本（レンタル）で書物に親しんだとされています。鹿児島県立図書館ではこの時代の史料がコピー・製本され、『安

永桜島噴火史料上・下』として自由に閲覧・借用できるようになっています。井村(1998)によると、この史料から噴火前後の出来事が以下のように明らかになっています。

噴火前日の1779年11月7日には有感地震が頻発し、21時にはやや強い地震が起こりました。11月8日11時頃には井戸が沸騰し、海水の変色も見られました。14時頃山腹で噴火が開始し、夕方最高潮に達しました。翌9日朝に噴煙がおさまると溶岩の流出が始まり、10日には南北両方の溶岩流が海にまで達しました。その後桜島山体での噴火は鎮まりますが、翌1780年8月6日に海底噴火が起こって津波が発生し、以降海底噴火による津波が5回発生しました。また、海底への溶岩流出などによって、桜島の北東海域には9つの島（安永諸島）が形成されました。その後の沈降や侵食で、現在は4つの島が残されています。



安永諸島の新島
(2023年12月撮影)

安永と大正の噴火を比べると

安永と大正の噴火は、その前兆現象や噴火の推移がよく一致することが史料から明らかになりました。実際、大正大噴火の際には住民が安永大噴火の言い伝えをもとに避難をしようとしたところ、測候所からの心配ないという情報で逆に避難が遅れたという事例もありました。(東桜島小学校の桜島爆発記念碑) 鹿児島市の桜島爆発記念碑にも、「大正と安永天明の噴火現象は大差ないように感じる。桜島の状態を観測考察し、かつての事例や旧記に照らして変化前兆を検討できれば、今後の災異を予知でき、被害が幾分軽減されるのではないか。(一部を現代語訳)」と記されています。いにしへの記録を今後の防災に活かしたいものです。

<引用文献>

- 井村隆介：史料からみた桜島火山安永噴火の推移。火山, Vol. 43, No. 5, pp. 373-383, 1998.
味喜大介・小林哲夫：桜島火山・南岳の形成過程－溶岩の古地磁気学的年代と噴出量の推定からの考察－。火山, Vol. 61, No. 1, pp. 237-252, 2016.